

査読論文

形容詞性接辞のレアリティに関する考察 — 「-ぽい」「-らしい」「-みたい」 —

岩崎 真梨子*

Study on the reality of adjective suffix “-poi, -rashii, -mitai”

Mariko IWASAKI*

Abstract

This paper examined the reality of "-poi" and "-rashii" "-mitai". The reality in this paper refers to facticity. For example, "Otoko-ppoi", it can interpret to two kinds, the "anti-fact" of expressing she is a woman like a man, and the "fact" of expressing a truly manly thing.

The reality of all the affixes is divided into four kinds, "fact", "anti-fact", "It is not which, either", and "It does not understand in the fact or the anti-fact", as a result of analysis. Moreover, historical changes are "-poi" and "-rashii" alike. And it was proved that a meaning and usage in recent years are "-poi" and "-mitai" alike.

Keywords : adjective, derivational suffix, reality, historical change in meaning and usage

キーワード：形容詞，派生接辞，レアリティ，意味用法の変遷

1. はじめに

本稿では、形容詞性接辞のレアリティについて、通時的に検討する。

ここでいうレアリティとは、「事実性」を指す。たとえば「男らしい人」というと、一般的に男性を思い描き、「男みたいなやつ」というと、一般的に女性を思い描く。前者は、「-らしい」が男に対して用いられ、接辞「-らしい」が事実（男としての性質を十分に有すること）を示す。後者は、「-みたいな」が女に対して用い

られ、反事実（女でありながら男の性質を有すること）を示す。

さて、ここ数年に亘って生産的に用いられ、若者言葉としても着目される形容詞性接辞に、「-ぽい」がある。「男っぽい人」は、「女なのに男っぽい」とも「男で男っぽい」とも解釈でき、男にも女にも用いることが可能である。名詞接続の「-ぽい」は、近年、盛んに論じられている。たとえば梅津(2009)¹⁾、小原(2010)²⁾、竹島(2010)³⁾、濱田(2010)⁴⁾などが挙げられる。これらの先行研究では上接部の広がりや意味・用法の変化について述べられていることが多く、「-ぽい」が何に対してどのように用いられているかについては、なお考察の余地が

平成 25 年 1 月 7 日受理

* 感性デザイン学部感性デザイン学科・助教

あるように思われる。

また、「-らしい」が典型（Aとしての性質を十分に備えていること）を示し、「-みたい」が比況（Aを類似のBでたとえる）を示すというのは、周知のことである。しかし、「-っぽい」も含めたこれらの形容詞性接辞が、いつ頃から・どのように用いられているかについては、まだ十分に明らかにされていない。

以上に挙げた3語は、いわゆる助動詞としての用法を有する。また、通時的に見ると、どの語もまず形容詞として用いられ、助動詞用法は新たに見られるようになる。尾谷（2000）⁵⁾、小島（2003）⁶⁾、小出（2005）⁷⁾では、「-っぽい」の形容詞の用法から助動詞用法が見られるようになると述べられている。

では、形容詞の用法と助動詞的用法の区別はどのようになされるのであろうか。まず、「-らしい」の例を見てみたい。

- (1) 人の家の、しかも引越す所の床を、そんなに汗かいてみがかなくても……と私は思った。とても彼らしい。

（吉本ばなな・キッチン 1991 平成2）

- (2) どうやらこの子供らしいが、無愛想きわまりない。

（毎日新聞 1997.4.30 平成9）

- (3) まだ少しふらふらする。やけに部屋が広く感じられる。やれやれ、まだ酒が残っているらしい。

（恩田陸・ネバーランド 2000 平成12）

(1)は形容詞、(2)(3)は助動詞である。形容詞の場合は、(1)のように程度副詞と共に起ることが可能であり、「-らしい」は上接名詞の性質を十分に有していることを示す。これに対し、名詞接続の例であっても副詞「どうやら」などと共起し、話者の知り得ないことについて「～と見える／考えられる」ことを示す場合は助動詞である。また、(3)のような活用語の言い切りを承けるものは助動詞である。

本稿の考察対象は、(1)のような例である。なお、形容詞であっても、「可愛らしい」や「し

おらしい」といった、上接部と「-らしい」とが意味的に区別できないものに関しては上接名詞の性質を十分に有することを示さないため、考察対象には含めない。

続いて「-っぽい」の例を見てみよう。

- (4) 長い髪をうしろに束ねてて、なんかミュージシャンっぽい。

（風野潮・ビート・キッズⅡ 1999 平成11）

- (5) 質素な部屋だった。画材や描きかけの絵が、あまり丁寧ではない感じで置いてある。2DKで、もう一つの部屋は寝室っぽい。

（山崎ナオコーラ・人の 2004 平成16）

- (6) 「あー、おかんはけっこうでもよかったっぽい。二日目とかめちゃくちゃ暇持て余してたし。

（有川浩・図書館内乱 2006 平成18）

「-っぽい」には、形容詞と助動詞の区別がつきにくい例が見られる。大部分は形容詞として解釈できるが、そのなかに「話者から～のように見える／考えられる」意が含まれるものが存する。たとえば、(4)のような例である。(4)は、男の外見がいかにもミュージシャンのようであることを示しているが、話者の知覚を通じた例であり、話者は男がミュージシャンであるか否かを知らない。このとき、「-っぽい」は男の外見的特徴を示すと同時に、話者の推測を示している。

これに対し、(5)(6)は助動詞的用法と見てよい。(5)は、話者がまだ中を見たことのない部屋に対して「寝室っぽい」と述べており、話者の推測を示している。(6)についても、話者が見た「暇を持て余している」光景から、「おかんはどうでもよかった」のであろうと推測していると考えられる。

本稿では、「男っぽい男」や「男っぽい女」のような形容詞の例と、(4)のような、外見を描写した例ではあるが話者の推測を示しているとも取れるものまでを考察対象とする。

最後に、「-みたい」の例を挙げる。

(7) 金属の柱に映った自分の姿を見ると、可笑しくてたまらなかった。青いオバケみたいだ。

(山崎ナオコーラ・浮世で 2006 平成 18)

(8) まるで、先ほどの花見は、まぼろしか蜃気楼だったみたいだ。

(川上弘美・センセイの 2004 平成 16)

(9) 女の子っぽいことが好きなわりに、犬井の性格はいわゆる男の子風で、恋愛対象は女の子みたいだ。

(山崎ナオコーラ・浮世で 2006 平成 18)

(10) 二人は何か、言葉を交わしてるみたい。聞こえないので、勝手に想像させていただけことにする。

(豊島ミホ・青空チェリー 2005 平成 17)

(7)(8)は比況、(9)(10)は推量の例である。「-ぼい」「-らしい」の考察対象が名詞接続の例であるのに対し、「-みたい」は、(8)に示す通り活用語の言い切りを承けるものでも、比況を示す場合がある。両者は前後文脈によって意味的に区別される。比況の例は、「自分」を「青いオバケ」、「花見」を「まぼろしか蜃気楼」とたとえており、たとえるものととえられるものとが一致しない。これに対し、推量の例では話者からそう見えている／考えられることが示されており、実際がどうであるかは不明である。

今回は、「-ぼい」「-らしい」と比較するため、考察対象は(7)のような名詞に接続して比況を示すものに限る。ただし、「-みたい」が他の2つの接辞とは意味・用法の異なるものである点については注意が必要である。

本稿では、「-ぼい」「-らしい」「-みたい」が示すリアリティの共通点と相違点を通時的に検討する。そのうえで、助動詞用法の成立過程について、接辞のリアリティの変遷を踏まえて明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と課題

2.1 レアリティに関する先行研究と課題

前田(2009)⁸⁾では、複文に関する研究にレ

アリティを取り入れられている。前田氏は、レアリティを3分類し、「レアティーという概念とその3分類は、論理文の分類と、状況文の一部に大きく関わりを持つ重要な概念であることがわかるだろう。」と述べられている。なお、前田氏の分類と用例は以下の通りである。

仮定的レアティー

仮説的レアティー

例：このボタンを押せば、水が出るだろう。

反事実的レアティー

例：このボタンを押せば、水が出たのに。

事実的レアティー

例：太郎が殴ると、花子が泣き出してしまった。

形容詞の用法と助動詞の用法を区別する際にも、レアリティが大きく関わると考える。「-ぼい」「-らしい」「-みたい」の推量用法では、話者が知覚などの根拠に基づき「事実はどうであるか」について述べる。これに対し、形容詞の場合は、「-みたい」の比況用法のように、事実がどうであるかは関連しないものも含まれる。事実と関連する例としない例とが、いつ頃から、どのように用いられているかについて明らかにしたい。これを明らかにすることで、助動詞用法の成立過程の検討に新たな見解が見出せるのではないと思われる。

2.2 「-ぼい」に関する先行研究と課題

砂川(2005)⁹⁾では、近年の「-ぼい」について、次のように述べられている。[]内は岩崎による。

近年では、「白熱灯っぽい蛍光灯」「夏っぽい服装」「今っぽい発想」「普通っぽい人」「古っぽい考え方」「嫉妬っぽい男」など、かなり幅広い語に使われるようになってきました。[中略]

これらは、「白熱灯のような蛍光灯」「夏らしい服装」「今風の発想」「普通に見える

人]「古くさい考え方」「嫉妬深い男」のように、それぞれ別の表現で言い分けられていたものが、すべて「っぼい」一語で間に合わされているわけです。

指摘の通り、「ーぼい」は「ーような」に近い意味で用いられることもあれば、「ーらしい」に近い意味で用いられることもある。

以下、筆者が採集した用例を見ておきたい。

- (11) 林 ところでお姉さまとは、お顔、あんまり似てらっしゃらないですよ。由紀さんは日本の美人だけど、お姉さまは彫りが深くて、外国人っぼい顔してますね。
(週刊朝日 第113巻第39号 2008.8.15 平成20)

この例では、日本人の「お姉さま」に対して、「外国人っぼい顔」をしていると述べている。姉の顔立ちに外国人の要素があることは、姉が日本人であることに反しており、(11)の「ーぼい」は反事実（実際には外国人ではないけれど、外国人の要素を有すること）を示すと考えられる。これに対し、以下の例を見られたい。

- (12) 水玉模様のノースリーブブラウスにショートパンツという夏っぼい格好。
(壁井ユカ子・鳥籠荘 2007 平成19)

ここでの「夏っぼい格好」とは、いかにも夏に着そうな服装を表している。いわば、「夏らしい服装」としても意味が変わらず、「ーぼい」は事実（夏に、いかにも夏に着そうな服装をしていること）を示す。ただし、この例が用いられた場面がたとえば秋であれば、「夏っぼい格好」は反事実を示すことになる。

では、事実を示す例・反事実を示す例はいつ頃から見られるのだろうか。採集した用例に基づいて明示したい。

2.3 「ーらしい」「ーみたい」に関する先行研究と課題

「ーぼい」以外に、事実・反事実を示す形容詞性接辞として、「ーらしい」「ーみたい」が挙

げられる。

「ーらしい」は、主に事実を示す。

- (13) こんな忙しい朝でも、友人の好みに合わせてお菓子を用意してきてくれるところが、美和子らしい細やかなところだ。

(恩田陸・夜のピクニック 2006 平成18)

「細やかさ」は「美和子」の有する性質であり、「忙しい朝でも、友人の好みに合わせてお菓子を用意してきてくれる」という行為は美和子の性質にふさわしいことが読み取れる。

「ーらしい」については、小島(1996)¹⁰⁾が通時的な観点も踏まえて、接辞と助動詞に分化していく過程を検討されている点で興味深い。

明治期以降の「らしい」を見ると、本来、「らしい」は、単に「そう呼ぶにふさわしい状態である」という語で、基本的には、実際にそうであるかどうかには無関心な表現だったものと考えられる。それが、時代が下るにつれ、実際にそうであるかどうかに関心を持つようになり、その結果、いわば中間的な用法が消えていき、実際にそうであるものについての接尾語「らしい」という表現と、「実際はどうだかわからない」ということを積極的に含んでいる助動詞「らしい」とに分化していったと考えられるのではないかと。

「ーらしい」のリアリティについては、小島氏の考察と同様の結論である。「実際にそうであるかどうかには無関心」な用例が先に見られ、その後、「実際にそうであるかどうか」が関わる用例が中心になっていく。小島(1996)では明治期の用例を中心に検討されているが、本稿ではもう少し幅広く、明治期から平成までの用例を分析する。

また、岡部(2004)¹¹⁾では、近世の接辞「ーらしい」を「性質叙述型」と「外見描写型」(「外見—実情一致タイプ」と「外見—実情不一致タイプ」に分かれる)に分けられている。この分

類は、本稿で事実・反事実と区別しているものと似ていると考えられる。以下、岡部 (2004) の分類と用例を挙げる。

性質叙述型

例：鬼「誠にきれいな手だナア。チツトモ病人らしくアねへぜ。」(春色辰巳園 p.412)

外見描写型

外見—実情一致タイプ

例：横になつて居るところへ、米八は元氣らしく二階へ来る。(梅暦 p.104)

外見—実情不一致タイプ

例：惣躰、男といふものは、女にあつて二世の三世のと真実らしくいひかけて、欺して見るは女をおとすおさだまりの口上、(膝栗毛 p.29)

性質叙述型は、「-らしい」が「ラシイに上接する語の表す性質(特性)を十分に備えている」という意味を表すとされており、事実を示していると考えられる。これに対し、外見描写型は話し手が「外見は～と見える」と描写しているものである。このうち実情不一致タイプは、外見ではそう見えるが実情は違ふと意識されるものであり、本稿では反事実¹²⁾に分類するものである。ただし、実情一致タイプは、実際に元氣か否かは問わないと考え、本稿では事実か反事実かに関わらないとした。

今回は実際(実情)と一致するか異なるかという観点で分類しているが、岡部氏の分類にある通り、「-らしい」「-っぽい」「-みたい」が外見について述べているのか、性質や特性について述べているのかという観点で検討することも重要である。

「-みたい」は、以下に示す通り、主に反事実を示す。

(14) 伊勢丹の外に出ると、綿ほこみたいな雪

がふっていた。わーおわーお、と言ってマーチンがぴょんぴょん飛び跳ねる。

(吉川トリコ・新宿伊勢丹 2006 平成 18)

「綿ほこ」と「雪」は別物であり、被修飾語である「雪」を「綿ほこ」でたとえている。「-みたい」については、「～みた／みるようだ」から「-みたい」への変遷や、現代語の意味・用法の記述はあるが、近世から現代までを扱った研究は見られない。

岩崎 (2012)¹²⁾ では、「-みたい」の意味用法の変遷を近現代から現代にかけて検討し、助動詞用法が成立する過程を明らかにした。今回は、リアリティという観点から、形容詞用法の変化について再検討する。

3. 「-っぽい」のリアリティ

3.1 現代語「-っぽい」のリアリティ

まず、現代語の「-っぽい」がどういったリアリティを示すかについて見ていく。以下の例を見られたい。

(15) a 月子は短大を卒業する時に、高校時代から付き合っていた恋人と別れた。無邪気を絵に描いたようなその男に、私はわりと好感を持っていたのだが、月子は子供っぽい彼に愛想が尽きたとスッパリ切り捨てたのだ。

(山本文緒・バイナッブル 1992 平成 4)

b スタッフさんで女性っぽい動きの男性がいるので、動きを参考にしてみますね。キュッキュッとキレのいい感じの動きで、すぐ人を触るんです(笑)。

(non-no No.816 2006.11.20 平成 18)

c 可愛いこともあれば、男性以上に男っぽい一面もある、ズルさもダメさも認めた上で、女性としての自分が好きだったりするんですね。

(steady No.24 2008.11.7 平成 20)

たとえば (15) a であれば、「もういい年をした

大人なのに子供っぽい」というように、「(その人物が) 本来備えるはずのない性質を有する」ことが示されている。子供・大人・女・男、というように、社会的・生理的に区別された集団などが上接部となる。

続いて、以下の例を見られたい。

(16) a 脚長に見えて旬度も高いフレアストレートをヘビロテ! はくだけで今年っぽい全身シルエットに。

(spring No.217 2007.10.23 平成19)

b 美有 私はギンガムチェックが新鮮だった。カジュアルにもきちんとにも行けるしね。

美優 美有っぽい!

(non-no No.868 2009.3.5 平成21)

c 翼 男っぽい人が好きなの♥ 肩幅が広くて筋肉もあって、稲葉さんみたいな細マッチョな人が理想!!

(non-no No.904 2010.11.20 平成22)

これらの例では、「-っぽい」が「いかにも～にふさわしい」ことを示していると考えられる。「今年っぽい」が「今年流行っているもの」に用いられている通り、事実を示す。

上接部は、「男」のような社会的・生理的に区別された集団を表すものもあるが、他にも全体の一部(時の流れの一部としての「今年」)にあたるものや、固有名詞が挙げられる。(16c)の「男っぽい」は男女どちらにも用いられるが、「今年っぽい」や「固有名詞+っぽい」についてはほぼ事実を示し、事実を示す「-っぽい」は特有の上接部をいくつか持つと思われる。

さらに、事実/反事実が判断できないものも見られる。次のような例である。

(17) a 振り返った私の首根っこを掴んでぶら下げているのは、あの、調布駅の地下通路ですれ違った、男だか女だか判んない、長髪の、オタクっぽいピンクのシャツの人じゃん何で!?

(舞城王太郎・阿修羅 2003 平成15)

b 先日、バリバリのキャリアウーマ

ンっぽいスーツ姿の女性が牛井屋さんで勢いよく食事していたんですよ。

(an・an No.1523 2006.8.9 平成18)

これらの例では、話者が見かけた人物が本当にオタク/キャリアウーマンなのかどうかは分からない。「-っぽい」は「(話者から)～に見える」ということを示すと考えられる。(17a)では「(私から)私の首根っこを掴んでぶら下げている人がオタクに見える」、(17b)では「(話者から)スーツ姿の女性がバリバリのキャリアウーマンに見える」ことが示されている。

(17a)では、「長髪の」や「ピンクのシャツ」といった、話者が「オタクの特徴」と見做しているような描写が見られるが、話者が「～に見える」と判断する根拠については前後文脈に明示されないことが多く、話者がその人(あるいは物など)を見てから判断するまでの時間が極めて短いと思われる。直感的にそう思った、という推量的判断が示されているのではないかと考えられる。

また、次のような例も見られる。

(18) a 高学年の子を持った時は、少し大人っぽい曲にした。

(毎日新聞 1998.9.12 平成10)

b 趣味はゲーム。アニメとかなんとかいう不快な女の子がきゃいきゃいやっているようなオタクっぽいものが好き。

(日日日・うそつき 2005 平成17)

これらの例では、「-っぽい」が、単に修飾される語(曲・アニメとかなんとかいう不快な女の子がきゃいきゃいやっているようなもの)の性質を示している。たとえば(18a)は、その曲が大人向けである・子ども向けであるといったことは問題にはならないと思われる。事実か反事実かに関わらないと考えられる。

以上のことから、「-っぽい」の示す意味とレアリティとの関連は、以下の4通りに分かれる。

a 反事実を示す (例:女っぽい男)

- b 事実を示す (例：男っぼい男)
- c 事実／反事実が判断できない
(例：レジの傍にいるアルバイトっぼい人)
- d 事実か反事実かに関わらない
(例：大人っぼい服)

a～cを区別する条件を、「レジの傍にいるアルバイトっぼい人」で表すと、

- a (話者が) レジの傍にいる人物はアルバイト店員ではないと知っている
- b (話者が) レジの傍にいる人物はアルバイト店員であると知っている
- c (話者が) レジの傍にいる人物がアルバイト店員なのかそうでないのか分からない

となる。つまり、話者が知覚した人物に関する情報をどれだけ持っているかによって区別される。

aでは「アルバイトではないけれどアルバイトのように見える」のであり、bでは「いかにもアルバイトらしく見える」のである。cは、話者の観察や直感によって「アルバイトかどうか分からないけれど、アルバイトのように見える」のであり、「～に見える」という判断を「-ぼい」が示していると考えられる。

dは、上接部の属性と被修飾語の属性が異なる場合である。「大人っぼい服」であれば、上接部の表す属性は「人」だが、被修飾語の属性は「物」である。

なお、「水っぼい酒」「白っぼい車」のような例は、「水／白色の割合が多い」ということが示され、(15)～(18)とは意味・用法を異にすると考えられるため、考察対象から外す。

3.2 「-ぼい」のレアリティの変遷

前節において、現代語の「-ぼい」のレアリティは、4通りに分かれることを示した。では、いつ頃からそのように分かれているのだろうか。

ここでは、「-ぼい」のレアリティの区別を通時的に見ていきたい。

「-ぼい」に関する調査資料のジャンル、ならびに用例数は以下の通りである。

【調査資料】

文学作品・新聞記事・漫画・雑誌

【用例数】

近世 82 明治 186 大正 165 昭和 1017
平成 1778 合計 3228

「-ぼい」は近世後期より見られる。近世後期から明治期の半ば頃にかけては、

(19) 茶見「わからなく理窟ツぼい嬢アだぞ」
(滝亭鯉丈・和合人 1822-1826 文政 5-9)

(20) おれの顔さへ見ると、あわれっぼい事ばかりいふから

(曲山人・仮名文章 1831-1834 天保 2-5)

(21) 一ト口たべて見るとおいしくなつて外のおさかななんぞより牛が好きになつたのだから私の牛を食べるのハしらうとじやアないくろっぼいのでスヨ

(暇名垣魯文・安愚樂鍋 1871-1872 明治 4-5)

のような、事実か反事実かに関わらない例のみが得られる。(19)(20)は、上接部の「理窟」や「あわれ」が人や物の属性になるわけではなく、ただ「理窟ばかり言う」「哀れな感じがする」という性質を示す。(21)の「くろっぼい」は、「玄人らしい」という意味で用いられている。しかし、これらの例についても、実際に素人であるか玄人であるかということは問題にならないと考えられる。

明治期の半ば頃以降、以下のような例が見られるようになる。

(22) 「私ア素人っぼい事をするようだが、手紙を一本書いておいたから、旦那の機嫌の好い時届けておくれ」

(三遊亭圓朝・業平文治 1885 明治 18)

この例では、遊女が「素人っぼい事をするようだが」と発言しており、「まるで素人のよう

なことをするが」という意味と取れる。「実際には素人ではないが」という反事実を示していると考えられる。

明治期の終わり頃以降になると、事実を示す例もみられるようになる。

- (23) 緋縮緬の腰巻が片膝毎露出^{むきだし}になって、その下からさすがに子供っぼい小さな足を食み出してゐる

(田村俊子・あきらめ 1911 明治44)

ここでは、十五歳の少女の足について「子供っぼい小さな足」としているの、いかにも幼いことが示されていると考えられる。

なお、反事実を示す例がなくなるわけではなく、大正期に以下のようなものが見られる。

- (24) a 豊頬で、眼鼻だちのちまちまと調った顔つきも子供っぼく、二十四とはとても受け取れなかった。

(里見弴・多情仏心 1922-1923 大正11-12)

- b 素人っぼいことを訊くやうだが、今度の一件について何にも心当りはねえかね

(岡本綺堂・半七捕物帳 1923 大正12)

その後、昭和期の終わり頃まで大きな変化は見られない。昭和期の終わり頃には、以下のような事実/反事実が判断できず、「～に見える」ことを示す例が見られるようになる。

- (25) a こちらを向いている角刈りのやくざっぼい男がおり、女の髪をつかんでカウンターに押しつけ、音がするほど頭を打ちつけながら何か鋭い目付きで喋っていた。

(五木寛之・こがね虫 1969 昭和44)

- b [写真を見ながら]湘南の海岸でしようか。トシ子は大胆な水着で、何かやくざっぼい男と肩を寄せ合っている。

(泡坂妻夫・花火と銃声 1988 昭和63)

これらの例では、「こちらを向いている男」「トシ子が肩を寄せ合っている男」が「やくざ」の特徴を有しており、「話者からはやくざに見え

る」ことが示されていると考えられる。

事実を示す例、反事実を示す例、事実か反事実かに関わらない例も引き続き見られる。以下は反事実を示す例である。

- (26) a そのころの先生にはまだ非常に若々しい書生っぼいところが多分にあったような気がする。

(寺田寅彦・夏目漱石 1932 昭和7)

- b にもかかわらず、ヨアヒムは異国にある三十男の子供っぼい感傷を理解しなかった。彼は、私を女性のヌードを見たくて仕方がない抑圧された欲望の持主と判断したのだ。

(五木寛之・ゴキブリの歌 1971 昭和46)

以下は事実を示す例である。

- (27) a もし年齢をあたえるとすれば十歳と十五歳の中ほどだが、いわゆる育つさかりの、四肢の発育がいじけずに約束されていて、まだこどもっぼい柔軟なからだつきで、

(石川淳・焼跡のイエス 1946 昭和21)

- b 「私思うんだけどね、つくづく、女っぼい女になりたかったわ」

(曾野綾子・太郎物語 1973 昭和48)

以下は事実か反事実かに関わらない例である。

- (28) a そのわきに少女っぼい花瓶がおかれ、白いえぞ菊の花が飾ってある。

(宮本百合子・播州平野 1946 昭和21)

- b いずれも似たような古めかしい色彩感覚の、子供っぼい絵ばかりであった

(筒井康隆・エディプスの恋人 1977 昭和52)

また、近年、次のような例が見られることには注意されたい。

- (29) a [ビーチサンダル]「デートではありえない」「手抜きっぼい」

(non-no No.854 2008.7.20 平成20)

- b クリスマスっぼいワンピースを購入。雑誌で着こなし研究しようっと。イブの予定はないけどね

(non-no No.863 2008.12.5 平成 20)

これらの例では、「手抜きっぽい」や「クリスマスっぽい」が、話者から見た「ビーチサンダル」や「ワンピース」の印象になっている。しかし、「クリスマスっぽいワンピース」は、「クリスマスに着ていくのにふさわしいワンピース」や「クリスマスを連想させる(たとえばサンタクロースが着る服のような)ワンピース」など、個々に解釈が可能である。個人の印象を自由に述べられる語であると考えられる。濱田(2010)において、

主観的判断であるため、個人個人で上接要素になる語に対するイメージや見出している特徴、属性が異なることもある。その主観的判断が上接要素を増やし、特徴さえ見出すことができれば上接要素になることが可能だということである。

のように述べられているのは重要であると思われる。

以上のことから、「-っぽい」のリアリティを通時的に見ると、次の3期になる。

1. 近世～明治期終わり頃

事実か反事実かに関わらない

2. 明治期終わり頃～昭和期終わり頃

事実か反事実かに関わらない

反事実を示す

事実を示す

3. 昭和期終わり頃以降

事実か反事実かに関わらない

反事実を示す

事実を示す

事実／反事実が判断できない

なお、「-っぽい」が話者の推量的判断を示すようになるのは昭和期の終わり頃以降である。初出例は以下の通り。

・雨が降りそうなことを「今日は雨ッポイ」

(言語生活 1982.6 昭和 57)

推量的判断を示す用法が成立する以前の接辞のリアリティは、「事実か反事実かに関わらない」→「反事実あるいは事実を示す」→「事実／反事実が判断できない」の順で増加していることが分かる。

4. 「-らしい」「-みたい」のリアリティ

4.1 「-らしい」のリアリティの変遷

「-らしい」に関する調査資料のジャンル、ならびに用例数は以下の通りである。

【調査資料】

文学作品・新聞記事

【用例数】

中世 70 近世 866 明治 1980 大正 2113
昭和 4857 平成 1295 合計 11181

「-らしい」は中世より見られる。(30) a は村上(1981)¹³⁾による。

(30) a カ、ル時分二人ラシイ人カアラハ、
秦二天下ヲ取ラレマイモノヲソ。

(史記抄・4 1477 文明9)

b Voto c oraxij. ヲトコラシイ(男らしい)男らしく雄々しい(こと)。
例,Voto c oraxij vonna.(男らしい女)雄々しい女。

(日葡辞書 1603 慶長8)

(30) a では、「人」が「立派な・徳のある人物」を指し、「人らしい(人)」で「そういった性質・性格を備えた(人)」であることを示す。ここでの上接名詞「人」は、意味としては「立派な」という形容詞であると考えられる。(30) b についても同様である。「男らしい」が女に用いられており、現代語とは異なる例になっている。しかし、ここでの「男らしい」は、「雄々しい」意とされており、「女なのに男の性質を有する」ことを示すのとは異なる。これらの「-らしい」は、事実か反事実かに関わらないと考えられる。

なお、中世には「つべらしい」（残酷な）や「ばけらしい」（化け物じみた）といった例も見られる。これらは、上接部「つべ」「ばけ」自体が「男」「女」のような自立した意味を持たず、レアリティとは関わらないため、今回は考察対象から除く。

以上のことから、中世の「-らしい」は、事実か反事実かに関わらないと考えられる。

次に、近世の例を見ていきたい。

(31) a 仁物らしき男、^{せうこ}枋の前後にたいを入
になひ、たいはたいハとうりけるを、

(安楽庵策伝・醒睡笑 1623 元和9)

b 父は、そんぢやうそこに奉公せし悴
侍なりしが、百ぬらりの嘘つき、追
従らしきへつらひ者なりければ、

(浅井了意・浮世物語1巻 1665 寛文5)

近世前期(1600年代半ばまで)の「-らしい」は、中世と同様である。たとえば(31) aの「仁物らしい」は、「人らしい」と同じく「立派な・徳のある」ことを示し、(31) bの「追従らしい」は「人におべっかを使う」ことを示す。

一方、近世中期(1600年代後半以降)になると、以下のような例が見られるようになる。

(32) せんだんの木陰よりみるに、この所の百
姓らしき者のふたりして、埋みし棺桶を
掘返す。

(井原西鶴・好色一代男 1682 天和2)

ここでの「-らしき」は、木陰から見える二人の人物を百姓と断言せず、「百姓に見える」ことを示していると考えられる。実際に百姓なのかは前後文脈では分からず、事実/反事実が判断できない例と考えられる。ただし、母語話者の直感としては百姓の可能性が極めて高いように読み取るのではないかと思われる。なお、こういった連体形「-らしい/らしき」の意味・用法については岩崎(2011)¹⁴⁾にて論じた。同じく近世中期以降、以下のような反事実を示す例が見られるようになる。(33)は亀井(2003)¹⁵⁾による。

(33) きりやうのよい人を斯波ノ左衛門よし将

と名付。心にいさみをつけたらばをの
づとくすりもまはらんと。いしやしゆの
さしづなれ共ほんのおとはならぬ故。
男らしい女中のお尋にてかく迄談合なり
しこと

(近松門左衛門・雪女 1708 宝永5)

ここでの「男らしい」は、女中が本来ならば男性が備える性質を有していることを示していると考えられる。

近世後期以降、事実を示す例も見られるようになる。

(34) おはんはお半につり合のよい年来(とし
ごろ)の役者、おちよはお千代らしい年
倍の役者でなければ、移らぬといつて合
点しねへはな。

(式亭三馬・浮世床 1813 文化10)

「お千代」は年齢の高い役であり、それにふさわしいものとして「年倍の役者」が挙げられているためである。(34)に見るように、「-らしい」が事実を示す場合は、「~にふさわしい」ということも意味する。

また、以下のような例も見られるようになる。

(35) 土場「芋はありやす。焼芋がいさ。こい
つは日見らしいぜ」

(滝亭鯉丈・和合人 1823-1841 文政6-天保12)

この例は、男たちが「月見」に対して「日見」(太陽を見る)をしようという提案をしている場面である。そして、「焼芋」を「日見にふさわしい食べ物である」としている。しかし、実際には「日見」などという行事はなく、「焼芋が太陽を見るとき食べるものとしてふさわしい」というのも、男たちが勝手に考え出したものである。従って、(35)は事実か反事実かに関わらないと考えられる。

なお、近世以降、「可愛らしい」「しおらしい」などの例が見られるようになる。これらは、中世の「人らしい」「つべらしい」などと同様で、レアリティを示す接辞ではないと考えられる。

ここで、近世までの「-らしい」が示すレアリティを整理しておく。

- a 事実を示す
- b 反事実を示す
- c 事実／反事実が判断できない
- d 事実か反事実かに関わらない

以下、明治期以降の例について検討する。明治期では、dが見られなくなり、上述のa・b・cの3通りが見られる。

まず、「-らしい」が事実を示す例を挙げる。

- (36) a 直臣は實に男らしき男なりき。
(巖谷小波・昭君怨 1895 明治28)
- b 二人で作るホームだもの、僕だって発言権がなきゃ」と成程哲也らしい佷屈い串戯を言って笑うと、
(二葉亭四迷・其面影 1906 明治39)
- (37) a 兄の額には学者らしい皺が段々深く刻まれて来た。
(夏目漱石・行人 1912-1913 大正元-2)
- b 先生は弱い聲音で、『最う泣いても可いんだよ』と言はれた相である。これは如何にも先生らしい言葉ではないか。

- (森田草平・漱石先生と門下 1917 大正6)
- (38) 我が國民が科學研究らしいもの始めたのは、明治以後のことで、
(阪田貞一・工業上の 1917 大正6)

以上の例は、「～にふさわしい」性質や言動を示している。今期、(36) aのような「AらしいA」の例が見られるようになる。「Aの性質を十分に持ち、Aにふさわしい」ことを示すと考えられる。

また、(38)のような例が新たに見られるようになる。「名詞+らしい／らしきもの」という形を取り、上接部そのものに限定せず、上接部を含む周辺までを「～にふさわしい」として示すと考えられる。上接名詞は偏る傾向にあり、固有名詞や春夏秋冬が挙げられる。

続いて、反事実を示す例を挙げる。

- (39) 酔っぱらいの様に管を捲いていると、い

つの間にか酒飲みの様な心持になる、坐禅をして線香一本の間我慢しているとどことなく坊主らしい気分になれる。

(夏目漱石・吾輩は 1905-1906 明治38-39)

- (40) 何処か男らしい気性を具えた奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。

(夏目漱石・こころ 1914 大正3)

以上の例は、「坊主でないのに坊主のような気分」「男でないのに男のような気性」と言い換えることが可能であると考えられる。近世と異なる点として、「気分」「気性」といった語を修飾していることが挙げられる。「男らしい女」、つまり「男のような女」という言い方はなく、あくまで「男らしい一面を有する」ことを示す。事実／反事実が判断できない例も見られる。

- (41) a 栗うりの童は、逸足出して逃去り、学生らしき男は、欠びしつ狗を叱し、女の子は呆れて打守りたり。
(森鷗外・うたかたの記 1890 明治23)
- b 誰か来たなと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらっしやいます」と小間使らしい声がする。

(夏目漱石・吾輩は 1905-1906 明治38-39)

- (42) a この人も商船学校出らしい書生肌の人だ。

(島崎藤村・海へ 1916-1918 大正5-7)

- b 小間使らしい少女が、飛ぶように駆けつけて来た。

(里見弴・多情仏心 1922-1923 大正11-12)

これらの例では、被修飾語に当たる人物が上接部の性質を有しており、実際には上接部かどうか分からないが、「～に見える／聞こえる」ことが示されていると考えられる。(41) bに見る通り、人物の見た目だけでなく「声」など視覚以外を根拠とするものについても用いられるようになる。

なお、明治期・大正期には、以下のような形容動詞語幹接続の例が見られる。

- (43) a 男振にがみありて利発らしき眼ざし、色は黒けれど好き様子とて四隣の娘どもが風説も聞えけれど、
 (樋口一葉・大つごもり 1894 明治27)
 b それを聞く度に、高柳は不快らしい顔付。(島崎藤村・破戒 1906 明治39)
- (44) a 或る日九郎右衛門は烟草を飲みながら、りよの裁縫するのを見ていたが、不審らしい顔をして、烟管を下に置いた。
 (森鷗外・護持院原の敵討 1913 大正2)
 b ひどく小心で生真面目らしい様子を見て取ると、
 (下村千秋・蟋蟀 1925 大正14)
- これらの例では、「そのような様子をしてい
 る」ことが示されており、事実か反事実かに
 関わらないと思われる。
- (43)(44)のような形容動詞語幹に接続する「
 ーらしい」について、鈴木(1988)¹⁶⁾では次の
 通り述べられている。
- 明治前期以降、今日と異なるラシイの意
 味・用法は漸減する。
 - 今日と異なるラシイは、明治前期と大正
 期に特に目立つ。
 - 今日と異なる意味・用法のラシイの中
 では、接尾語としてのラシイが助動詞ラシ
 イより大きな割合を示す。
 - 今日と同じ意味・用法の中では、助動詞
 としてのラシイの割合が漸増して行く。

ここに挙げられるbのなかに、「ーそうだ」
 「ーようだ」などと置き換えられる「ーらしい」
 が含まれる。明治後期から大正期にかけて「
 ーらしい」が凌駕するが、昭和期に入ると「
 ーそうだ」「ーようだ」のほうが優勢になるとある。
 今回の考察には大きく関わらないが、明治期・
 大正期の「ーらしい」が、その他の時期とは区
 別される点には注意すべきであろう。

続いて、昭和期以降の例について検討する。
 昭和期以降、「ーらしい」のレアリティの区分
 は再び変化を見せる。反事実を示す例が見られ
 なくなり、事実を示すものと事実/反事実が判
 断できないものの2通りになるのである。

以下の例は、「～にふさわしい」ことを示す。

- (45) a 万福寺の松雲和尚さまが禅僧らしい
 質素な法衣に茶色の袈裟がけで、わ
 ざわざ見送りに来たのも半蔵の心を
 ひいた。
 (島崎藤村・夜明け前 1929-1935 昭和4-10)
 b 裏切った娘を憎み憤る感情がうすれ
 てゆく後から新に人の子の親らしい
 無私の愛情が芽生えてきた。
 (中山義秀・華燭 1947 昭和22)
 c いくら年上の社会人であっても女に
 奢られるのはいやというスポーツマ
 ンらしい保守性を見せ、

(筒井康隆・エディプスの恋人 1977 昭和52)

- (46) a 真昼、春らしい陽気で、外からはマ
 ンションの庭で騒ぐ子供たちの声が
 聞こえる。
 (吉本ばなな・キッチン 1991 平成3)
 b 銃を出したのは二人ほどだったが動
 きに素人らしい無駄が多く、使う暇
 もなく防衛員たちに銃を叩き落とさ
 れた。

(有川浩・図書館戦争 2006 平成18)

これらの「ーらしい」は、すべて事実そうで
 ある人・ものに対して用いられている。
 以下は、「ーらしい/らしきもの」で、上接部
 そのものに限定せず、上接部を含む周辺までを
 「～にふさわしい」として示す例である。

- (47) a 「じゃ、一人でお帰りなさい」と私
 はいまはもう微笑らしいものさえ浮
 べながら返事をした。
 (堀辰雄・美しい村 1933-1934 昭和8-9)
 b 入ってきた彼を見たとき、彼女は、
 昨日のようには明るく微笑しなかつ
 たら。——何事かがおこり、その幸福、

いや幸福らしいものが、いま破戒されようとしているのだ、ということ

を、
(阿部知二・黒い影 1949 昭和 24)

(48) ものすごく能率の上がらない一日だったが、定時頃になって、ようやく報告書らしきものが仕上がった。

(東野圭吾・夜明けの街で 2007 平成 19)

また、事実／反事実が判断できない例も、引き続き見られる。

(49) a 女主人が静かに呼ぶと、隣の部屋から息子らしい落ちつきのある二十五六の男が、棒のようにはいつて来た。

(林芙美子・放浪記 1928 昭和 3)

b 東京弁らしい調子の標準語だから、土地の者ではない。

(松本清張・点と線 1957-1958 昭和 32-33)

c きう市電の中で言葉の荒荒しい部落の人らしいおばさんに向けた私の眼ざしは一体どうであったのか。

(高野悦子・二十歳の原点 1971 昭和 46)

(50) a 誰にでもすぐできる簡単さが人気の秘密だった。客は仕事帰りのサラリーマンやOLらしい若い男女も大勢いた。

(桐野夏生・OUT 1997 平成 9)

b 「小山内」

派出所の入り口に青い制服がもう一人現れて、若い警官の名前らしきものを呼んだ。

(壁井ユカ子・鳥籠荘 2007 平成 19)

これらの例では、被修飾語に当たる人物が上接部の性質を有しており、実際には上接部かどうか分からないが、「～に見える／聞こえる」ことが示される。

「-らしい」のレアリティの変遷をまとめると、次の5期になる。

1. 中世～近世中期

事実か反事実かに関わらない

2. 近世中期

反事実を示す

事実／反事実が判断できない

事実か反事実かに関わらない

3. 近世後期

事実を示す

反事実を示す

事実／反事実が判断できない

事実か反事実かに関わらない

4. 明治期・大正期

事実を示す

反事実を示す

事実／反事実が判断できない

5. 昭和期以降

事実を示す

事実／反事実が判断できない

「-らしい」が推量を示すようになるのは近世後期以降である。

・長「ア、かへるがネ。今のはどふも米八さ[°]んらしいヨ。かくさずとい、じやアありませんか(為永春水・春色梅児誉美 1833 天保 4)

推量用法成立まで、接辞のレアリティは、「事実か反事実かに関わらない」→「反事実を示す」→「事実／反事実が判断できない」→「事実を示す」の順で増加する。推量用法が見られるようになった後は、示し得るレアリティが減っていく。

4.2 「-みたい」のレアリティの変遷

「-みたい」に関する調査資料のジャンル、ならびに用例数は以下の通りである。

【調査資料】

文学作品・新聞記事・漫画・雑誌

【用例数】

明治 14 大正 122 昭和 1197 平成 678

合計 2011

「-みたい」は明治期より見られる。まず、以下のような例が明治期の半ばに見られる。

(51) お前鏡を見た事がないのかえ、火吹達磨ひぶきだるまみたいな顔をしてさア、お前はんの顔を見ると馬鹿／＼しくなるのだよう」

(三遊亭円朝・敵討 1888 明治21)

(52) a それも彼がお重から、あなたの顔は将棋の駒ひまみたいよと云われてからの事である。

(夏目漱石・行人 1912-1913 大正元-2)

b 山育ち野育ちの猿まみたいな子供等に混つて、

(上司小剣・狐火 1917 大正6)

これらの例では、たとえるものととえられるものとが異なる。(52) bを例とすると、子供と猿が異なる属性に属していることは明らかである。このことから、反事実の例であると考えられる。

同じく明治期の半ば以降、次のような例が見られるようになる。

(53) a お前の様な若い子こみたいな者と何う斯う云う訳は有りませんから一緒にお寝よ」

(三遊亭円朝・真景 1898 明治31)

b 本当に芳子さんはああいうしっかり者だから、私わみたいな無教育のものでは……」

(田山花袋・蒲団 1907 明治40)

(54) 喋舌って潰すのも、黙って潰すのも、どうせ僕わみたいな穀潰しにゃ、同なし時間なんだから、ちっとも御遠慮にゃ及びません。(夏目漱石・明暗 1916 大正5)

これらの例では、ある性質を有する者が例示され、その人物に近い、ある性質を有する者たちが示される。(53) aを例とすると、「お前」は若者の1人として挙げられており、「若い子みたいな者」で年齢の若い人物を広く示していると考えられる。「お前」が「若者」であるとい

うことは事実として示されている。

続く大正期の終わり頃以降、次のような例が見られるようになる。

(55) a ねえ、三好先生、吾々は、こう云うふかしたての振りパンみみたいなものは頂戴しませんでしたね」

(里見弴・多情仏心 1922-1923 大正11-12)

b 組んでトランプをやっていたんだから、四人だった。何処でやっているのかと云うと、それが君の家の庭なんだ。それでいざやろうという段になると、君が物置みみたいな所から、切符売場のようなになった小さい小舎を引張り出して来るんだ。

(梶井基次郎・雪後 1926 大正15)

これらの例では、話者が見ている／見たものが何であるのか不明であり、「-みたい」は「(話者から)～に見える／見えた」ことを示していると考えられる。(55) bであれば、夢のなかで見た場所が実際に「物置」なのかどうかは確かめようもない。「-みたい」は、あくまで話者にとってそのとき物置に見えたということを示す。事実／反事実が判断できない例であると考えられる。

ここまでの「-みたい」のレアリティをまとめると、以下の3通りとなる。

- a 反事実を示す
- b 事実を示す
- c 事実／反事実が判断できない

昭和期は、終わり頃まで大きな変化は見られない。上述した a・b・c の3通りに分かれる。以下は、反事実の例である。

(56) a 大根の切り口みみたいな大阪のお天陽様ばかりを見ていると、

(林芙美子・放浪記 1928 昭和3)

b ここから迎えに行った人？ 東京の人？ まるで母親みみたいで、僕は感心して見てたんだ。

(川端康成・雪国 1935-1947 昭和 10-22)

c 「なんや、河童みたいな子やないか」

(開高健・巨人と玩具 1957 昭和 32)

以下は、「-みたい」が事実を示す例である。

- (57) a 「よしんば、あつてみたところで、とてもあんだ、おまえさんみたいな子どもに、お給金を払ってくれるうちなんかありゃしないよ。

(山本有三・路傍の石 1937 昭和 12)

b とくに、きょうみたいに暑い日に、なにも食わずに労働すれば、誰だつて頭がへんになる。

(三浦哲郎・驢馬 1957 昭和 32)

c おれみたいな凡才は家族をかかえて、とてもやって行けないからね。

(石川達三・青春の蹉跎 1968 昭和 43)

前期に確認したものと同様、人称代名詞あるいは時間・期間を上接部とする。

以下は、事実／反事実が判断できず、「(話者から)～に見える／見えた」ことを示す。

- (58) a 新宿駅の汽車の汽笛が鳴ると、一番最後に、私の番で銀流しみたいな男がはいって来た。

(林芙美子・放浪記 1928 昭和 3)

b 戦闘機モ丸デ下手デアルサウナ、初陣ミタイナ奴バカリデ実ニ心許ナイ。

(北杜夫・楡家の人びと 1963 昭和 38)

c 「いつかここの帰りに」と栄二が云つた、「三人のやくざみてえなやつにからまれたことがあつたっけ」

(山本周五郎・さぶ 1963 昭和 38)

なお、昭和期の終わり頃になると、引用内容を表す「-みたい」の例が新たに見られるようになる。

- (59) a あのころ、かれは芸術祭参加のテレビ作品をしきりにやりましたね。そのとき、「何んだ、あんな音楽を書いて……、恥ずかしいじゃないですか」とかれがいうんで、「あんだの作品と、どっちが恥ずかしいんだ」

みたいなことになって、そして別れましたね。

(キネマ旬報 No.1460 1974.12.25 昭和 49)

b 「うーん、こないだまでブラブラしていたようだけれど、せんだつての電話では絵本の出版社に就職がきまった、みたいなこと言っていたよ」

(椎名誠・新橋 1985-1987 昭和 60-62)

これらの例では、「-みたい」の上接部が過去の発話内容を示しており、「-みたい」が引用内容を示している。(59) a を例とすると、実際に「あんだの作品と、どっちが恥ずかしいんだ」と言ったかどうかは分からないが、それに近い内容の話であったことが示されていると考えられる。こういった例の意味・用法ならびに成立過程については、形容詞と助動詞の両方を踏まえて論じる必要があると思われるため、今回は考察対象とはしない。

近年では、事実／反事実が判断できない例は見られにくいようである。今回、採集した用例では見られなかった。また、文末・発話末に連体形「-みたいな」が用いられる例が新たに見られるようになる。

以下、近年(平成)の例を確認しておきたい。まず、反事実を示す例を挙げる。

- (60) a さらに2話で、ウィリスが試合から命からがら逃げ出す場面で、殴られたり切り傷や腫れ、血痕がなく、ゆで卵みたいな顔してるってのは何故なんだ!

(ダ・ヴィンチ No.7 1994.11.6 平成 6)

b そうだ、クリスマスです。緑のコートに赤いセーター、茶色いズボン、樅の木みたいなですね。

(川上弘美・センセイの 2004 平成 16)

以下、事実を示す例を挙げる。

- (61) a 男はね、昔みたいな小説家の三点セット、貧乏・病氣・女を経験している人が少ないせいとか、ちょっと圧倒されている。

(ダ・ヴィンチ No.7 1994.11.6 平成6)

- b 私みたいに冷たい人間に聞いてもしょうがないのに。私はタカソウと話したいんだから。

(山崎ナオコーラ・浮世で 2006 平成18)

最後に、近年になって新たに見られるようになった文末・発話末の連体形「-みたいな」の例を挙げる。

(62) a [日本人のクリスマスの過ごし方]

伝書鳩のようにズラッとフランス料理屋さんに並んで同じものを黙々と食べているみたいな。

(an・an No.947 1994.11.25 平成6)

- b 私、基本的に寂しがり屋だから。昔はギリギリまで誰かと一緒に外で遊んで寂しさをまぎらわす……そんな生活をしていたの。その時ばかりは、ママがくれたサボテンですら、「あれ、死んだよ？」みたいな (笑)。

(non-no No.824 2007.4.5 平成19)

これらの例では、話者から見た内容を「-みたい」が承けている。(62) aであれば、日本人のクリスマスの過ごし方は、話者からすると「伝書鳩のようにズラッとフランス料理屋さんに並んで同じものを黙々と食べている」感じがするのである。上接部はあくまで話者が見てそう思った・考えたことを示す内容であり、事実か反事実かに関わらないのではないと思われる。また、(62) bは、過去に起きた出来事を話者の言葉で説明している。以上のことから、文末・発話末の「-みたいな」は、話者から見た／感じたことを示すと考えられる。これについても、引用内容を表す「-みたい」と同様、形容詞と助動詞の両方を踏まえて論じる必要がある。

「-みたい」のレアリティの変遷をまとめると、以下の3期になる。

1. 明治期半ば～大正期終わり頃

- 反事実を示す
事実を示す

2. 大正期終わり頃～近年

- 反事実を示す
事実を示す
事実／反事実が判断できない

3. 近年

- 反事実を示す
事実を示す
事実か反事実かに関わらない

「-みたい」が推量を示すようになるのは、昭和期半ば以降である。

・あなたは大建築家になるよりも、政治家になってもいい素質があるみたいね。

(石川淳・処女懐胎 1947 昭和22)

推量用法成立まで、接辞のレアリティは、「反事実・事実を示す」→「事実／反事実が判断できない」の順に増加する。「-ぼい」「-らしい」とは異なり、「事実か反事実かに関わらない」例が見られない。

元が「～見る／見たようだ」であることから容易に推測できるが、レアリティという観点を取り入れても、「-みたい」が推量用法を獲得する過程は「-ぼい」や「-らしい」とは異なることが明らかである。

5. 形容詞性接辞のレアリティと意味用法の変遷

以上述べてきたことを踏まえ、「-ぼい」「-らしい」「-みたい」の共通点ならびにそれぞれの特徴、相違点を検討する。

まず、すべての接辞に共通するのは、「事実を示す」「反事実を示す」「事実か反事実かに関わらない」「事実／反事実が判断できない」という4つの分類が見られることである。

ただし、「事実を示す」場合、「-みたい」の用法は特徴的であり「-ぼい」「-らしい」とは異なるといえよう。「-みたい」が事実を示す場合は、「私みたいな臆病者」や「今みたいな就職難」というように人称代名詞や時間・期

間を承け、決まった形で見られる。

続いてそれぞれの接辞の特徴について述べる。

「-ぼい」

「-ぼい」は、事実か反事実かに関わらない例が常に見られる点に大きな特徴があると思われる。また、近年の「-ぼい」は、単にももの属性を示すだけでなく、ある人物が抱く印象をも示すようになる。これは、「-ぼい」がもともと「実際はどうであるか」ということに重点を置かない意味・用法を有する接辞だからではないかと思われる。また、話者が（事実・反事実にとらわれず）自分の印象を自由に述べられることから、「-らしい」「-みたい」「-風」などに近い意味で用いることが可能と考えられる。他の接辞と比較しても、近世から現代に至るまで事実か反事実かに関わらないのは「-ぼい」のみである。「-らしい」では途中で見られなくなり、「-みたい」では近年にならなければ見られない。

「-らしい」

「-らしい」は、明治期・大正期以降に事実か反事実かに関わらない例が見られなくなり、昭和期以降に反事実を示す例が見られなくなる。現代語では、事実を示すものと、事実／反事実が判断できないものに分かれる。小島（1996）で指摘された通り、もとは「実際はどうかかわからない」ものまで示し得たが、時代が下るとそういった例は見られなくなるのである。従って、リアリティを幅広く示し得る「-ぼい」及び「-みたい」とは、現代語では意味・用法の重複が少ないと考えられる。

ただし、事実を示す「-らしい」と「-ぼい」では、特に固有名詞を承ける場合に意味が重なり合う。また、「-らしい」「-ぼい」のリアリティを通時的に見ると、「事実か反事実かに関わらない」ものから始まり、途中で「事実／反事実が判断できない」例が見られるようになるという、似た変遷を辿っていることが明らかである。

「-みたい」

「-みたい」は、「-ぼい」「-らしい」とは

異なり、事実か反事実かに関わらない例が近年にならなければ見られず、また、事実／反事実が判断できない例が近年では見られない点が特徴的である。

リアリティの区別、変遷ともに、「-らしい」との共通点はほぼないと見られる。ただし、「-ぼい」については、「-らしい」に比べて近年の区分が似ている。特に、事実か反事実かに関わらない例において、「話者から見た／感じたことを示す」点が共通していると考えられる。

6. おわりに

ここまで述べてきた「-ぼい」「-らしい」「-みたい」のリアリティの変遷をまとめると、次のようになる。

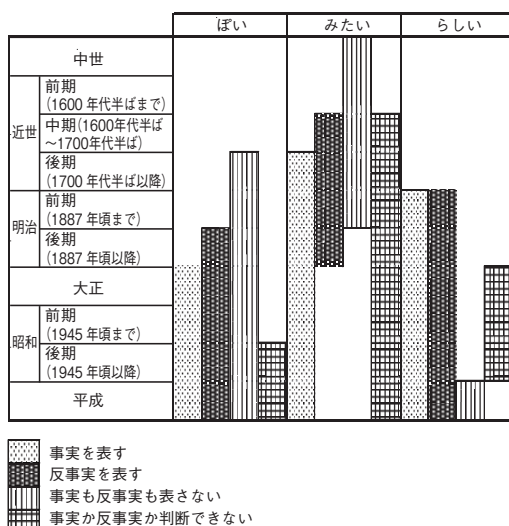


図 1

以上の通り、「-ぼい」「-らしい」「-みたい」の接辞の用法を、リアリティの観点から検討し、図1を得た。ただし、今回は、「明日は雨が降るっぼい／らしい／みたい」のような、いわゆる推量用法の例を含めて体系的に論じたものではない。接辞のリアリティと助動詞の意味・用法とがどのように関連するかについては、稿を改め

て論じたい。

なお、用例出典を示すにあたり、作品名が長いものは略した。正式な作品名は次の通りである。

人の…人のセックスを笑うな / 浮世で…浮世でランチ / センセイの…センセイの鞆 / 烏籠荘…烏籠荘の今日も眠たい住人たち 2巻 / 新宿伊勢丹…新宿伊勢丹で待ち合わせ / パイナップル…パイナップルの彼方 / 阿修羅…阿修羅ガール / 仮名文章…仮名文章娘節用 / 業平文治…業平文治漂流奇談 / こがね虫…こがね虫たちの夜 / 夏目漱石…夏目漱石先生の追憶 / 真景…真景累ヶ淵 / 新橋…新橋烏森口青春篇 / タンポポの…タンポポのわたげみただね / 敵討…敵討札所の靈験 / 雪女…雪女五枚羽子板 / 工業上の…工業上の戦後経営策 / 吾輩は…吾輩は猫である

【出典一覧】

キッチン 福武書店 1986年 / C D-毎日新聞 '98 毎日新聞社 1999年 / ネバーランド 集英社 2000年 / ビート・キッズII 講談社 1999年 / 人のセックスを笑うな 河出書房新書 2004年 / 図書館内乱 メディアワークス 2006年 / 浮世でランチ 河出書房新書 2006年 / センセイの鞆 『太陽』1999.7-2000.12 連載 文藝春秋 2004年 / 青空チェリー 新潮社 2005年 / 週刊朝日 朝日新聞出版社 2008年 / 烏籠荘の今日も眠たい住人たち 電撃文庫 2007年 / 「処女同盟」第三号 集英社 2007年 (新宿伊勢丹で待ち合わせ所収) / 夜のピクニック 新潮社 2006年 / パイナップルの彼方 角川文庫 1992年 / non-no 集英社 / steady 宝島社 / spring 宝島社 / 阿修羅ガール 新潮社 2003年 新潮社、2005年 新潮文庫 / an・an マガジンハウス / うそつき 新風舎 2005年 / 花暦八笑人 滑稽和合人 妙竹林話七偏人 三浦理編 有朋堂書店 1915年 / 江戸語大辞典 前田勇 講談社 1974年

(仮名文章娘節用 所収) / 明治開化期文學集 (一) 著者代表 暇名垣魯文 筑摩書房 1966年 (牛店雑談 安愚樂鍋 所収) / インターネット図書館 青空文庫 はる書房 2005年 (業平文治漂流奇談・蟹工船・夏目漱石先生の追憶・敵討札所の靈験 所収) / 日本国語大辞典第二版 小学館国語辞典編集部編 小学館 2001年 (半七捕物帳・あきらめ 所収) / 宮本百合子集 新潮日本文学 21 新潮社 1973年 (播州平野 所収) / 昭和文学全集第26巻 吉村昭 立原正秋 宮尾登美子 山口瞳 新田次郎 五木寛之 野坂昭如 井上ひさし 小学館 1988年 (こがね虫たちの夜 所収) / 花火と銃声 講談社 1982年 / ゴキブリの歌 毎日新聞社 1971年 / 『言語生活の耳』 沢木幹栄編 筑摩書房 1989年 / C D-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社 1995年 (焼跡のイエス・太郎物語 大学編・雪後・放浪記・巨人と玩具・路傍の石・驢馬・青春の蹉跎・さぶ・こころ・大つごもり・エディプスの恋人・美しい村・点と線・二十歳の原点 / 処女懐胎 所収) / 太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース 国立国語研究所編 博文館新社 2005年 (狐火・照君怨・漱石先生と門下・工業上の戦後経営策・蟋蟀 所収) / C D-ROM版 新潮文庫 明治の文豪 新潮社 1997年 (蒲団・行人・明暗・其面影・吾輩は猫である・うたかたの記・護寺院原の敵討 所収) / C D-ROM版 新潮文庫 大正の文豪 新潮社 1997年 (多情仏心・海へ・破戒・夜明け前 所収) / キネマ旬報 (株) キネマ旬報社 / ダ・ヴィンチ メディアファクトリー / 檸檬のころ 幻冬舎 2005年 (タンポポのわたげみただね 所収) / 『史記桃源抄の研究』 本文篇4 亀井孝・水沢利忠編 日本学術振興会 1971年 / 嘶本大系第2巻 武藤禎夫・岡雅彦編 東京堂出版 1976年 (安楽庵策伝『醒睡笑』所収) / 『井原西鶴① 新編日本古典文学全集66』 暉峻康隆・

東明雅校注・訳 小学館 1996年(好色一代男 所収) / 『浮世床 四十八癖 新潮日本古典集成(第52回)』本田康雄校注 新潮社 1982年 / 織田作之助・武田麟太郎・阿部知二・尾崎士郎・火野葦平・中山義秀『昭和文学全集』第13巻 小学館 1989年(華燭・黒い影 所収) / 図書館戦争 メディアワークス 2006年 / 『夜明けの街で 角川書店 2010年(単行本2007年) / OUT 講談社 1997年 / 『春色梅兎誉美 日本古典文学大系64』中村幸彦校注 岩波書店 1962年

参考文献

- 1) 梅津聖子(2009)「現代日本語にみる接尾辞「ばい」の広がり」『拓殖大学日本語紀要』19
- 2) 小原真子(2010)「接尾辞「-ばい」について」『島大言語文化』29
- 3) 竹島奈歩(2010)「接尾辞「ばい」と共起する名詞について —新聞記事の見出しを例に—」『同志社大学日本語・日本文化研究』8
- 4) 濱田佳苗(2010)「接尾辞「ばい」について」『愛知大学 國文學』49 愛知大学國文學会
- 5) 尾谷昌則(2000)「接尾辞「ばい」に潜むカテゴリー化のメカニズム —「女っばい人」は女ですか?—」『日本語言語学会第120回予稿集』於千葉大学
- 6) 小島聡子(2003)「接尾語「ばい」の変化」『明海日本語』8
- 7) 小出慶一(2005)「接辞「~ばい」の用法の広がり —「雪が降るっばい」という表現はどのように成立したか—」『群馬県立女子大学紀要』26
- 8) 前田直子(2009)『日本語の複文』くろしお出版
- 9) 砂川有里子(2005)「間違ってるっばい」北原保雄編『続弾! 問題な日本語』大修館書店 pp.110-114
- 10) 小島聡子(1996)「「らしい」について」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』明治書院
- 11) 岡部嘉幸(2004)「近世江戸語におけるラシイについて」近代語学会編『近代語研究』12 武蔵野書院
- 12) 岩崎真梨子(2012)「「-みたい」の史的変遷」『岡山大学大学院 社会文化科学研究科紀要』第34号
- 13) 村上昭子(1981)「接尾辞ラシイの成立」『国語学』124
- 14) 岩崎真梨子(2011)「-らしい」の連体用法に関する考察」『岡山大学大学院 社会文化科学研究科紀要』第32号
- 15) 亀井裕子(2003)「近世上方語における接尾語「ラシイ」について」『國學院大学 大学院紀要』35
- 16) 鈴木英明(1988)「明治期以降のラシイの変貌」『国語国文』57-3

要 旨

本稿では、形容詞性接辞の「-ぼい」「-らしい」「-みたい」のリアリティを検討し、通時的に示した。ここでのリアリティとは事実性のことである。たとえば「男っぽい人だ」というとき、女なのに男のような人であることを示す「反事実」と、いかにも男らしいことを示す「事実」の2通りに解釈し得る。

分析の結果、すべての接辞のリアリティが、「事実を示す」「反事実を示す」「事実か反事実かに関わらない」「事実か反事実か判断できない」の4通りに分けられた。また、リアリティという観点で3語を比較したとき、「-ぼい」と「-らしい」は史的変遷が似ており、「-ぼい」と「-みたい」は近年の意味・用法が似ていることが明らかになった。

キーワード：形容詞，派生接辞，リアリティ，意味用法の変遷